

(2) 芸術・芸能への関心

丸山の小学生時代、映画はまだ「カッドウ」と呼ばれ、無声の映像に弁士がナレーションをつけるというものだった。1921(大正10)年に一家で四谷に移ると、丸山は近所にあった「四谷館」に通いつめる。当時、映画館は不良少年のたまり場であり、母は許可しなかったが兄に入れ知恵され、母が許しそうな「文部省推薦映画」を観に行く体で、二本立てのうち「推薦映画でない方の一本」を観に行った。「推薦映画」にも『オーバー・ゼ・ヒル』(H・ミラード監督)などの傑作はあったが、丸山の心を捉えたジャンルは連続大活劇だった。1925(大正14)年、小学6年生になると『荒木又右衛門』(池田富保監督)などのチャンバラ映画をさかんに観るようになった。のちに丸山は、日本のチャンバラ映画を高く評価している。

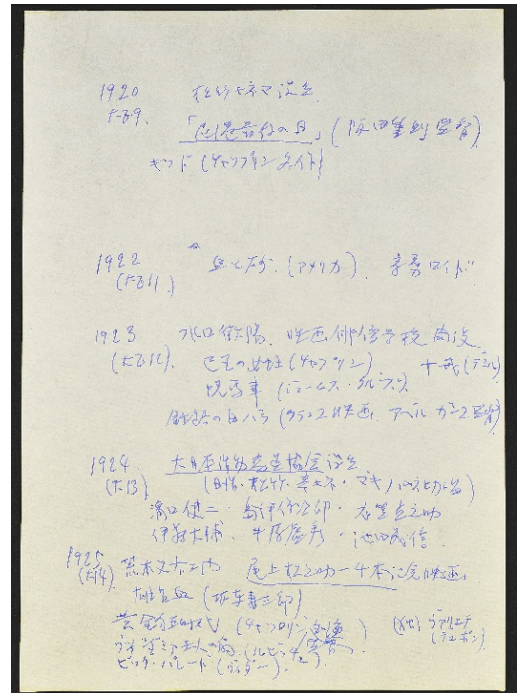
チャンバラ映画というともすると芸術的には「低い」もののように見られるけれども、実はチャンバラ映画というジャンルは、日本独特というだけでなく撮影技術の上で日本が世界に先がけ、世界に貢献した誇るべき分野なのである。

(丸山眞男「映画とわたくし」)

丸山によれば、1920年代は映画のジャンルで「新しい表現形式ができ、それが登り坂になって、この新しい可能性をフルに試してみたいというわけで、世界的にいい人材が映画の世界に集った」。創造性に満ちていたこの時期の映画は、丸山の人格形成に大きな影響を

与えたのである。(画像:「映画とわたくし」草稿〈丸山文庫資料番号375〉)

こうした映画鑑賞は母には内緒にしていたが、あるとき塾をサボって観に行こうとしたところを見つけ、母に泣かれてしまったという。さらに、兄と一緒に浅草に映画を観に行こうとしたのを母が見とがめ、両親が映画鑑賞をめぐる大喧嘩をはじめたこともあった。そのときも喧嘩のすきをついて浅草に出かけ、映画館を3軒はしごする始末であった。



このほか、父に連れられて四谷にあった「喜よし」という寄席によく通っていた。ここで父は芸を磨くことの難しさを教え、一芸を身につけるように諭したという。また、母の影響で詩歌に親しんだ。ときおり実作も行い、小学生雑誌に掲載されたこともあったという。